

千住茄子 足立郡也、江戸より二里東に當り、

寺島茄子 西葛西の内也、中の郷の先、江戸より一里餘、

形長きあり、丸きあり、横ひらくしてみぞあるあり、

〔續修東大寺正倉院文書 三十二〕造佛所作物帳斷簡年紀不詳、按成卷文書四十五卷書、收天平六年造佛所作物帳中卷斷簡、恐與此同物也、

買雜菜直錢廿一貫七百十六文略○中

茄子十一斛直一貫三百五十六文二斛五斗六升、別一文、八斛四升四斗、升別一文、

〔時慶卿記〕慶長八年五月廿七日、茄子初而賣聲アリ、

〔徳川禁令考四十九魚鳥野菜諸食物〕貞享三寅年五月

野菜もの之儀、節に入候日より賣出之事、

覺○中

一なすび

五月節の

〔日次紀事七月〕凡茄子自此月尾至九月首、其味特美、俗言秋茄子不使婦食之、凡婦姑間多相惡、故不

欲使婦食、味良者、此言元出自姑語、

〔安齋隨筆後編一〕一秋茄子 秋茄子娶にくはせぬ、歌秋なすびわさ、のかすにつけませて、娘に

はくれじたなにおくとも、夫木集にあり、子按に、生々編、茄子性寒、利多食必腹痛、下利、女人能傷子

宮也と、これに據る歌なるべし、俗に茄子味佳也、姑たる者、娘を憎みて食すまじきと云意也と解

くは捧腹すべし、ワサ、は早酒新酒也、

(頭註) 秋なすび云々、夫木にありといへるは誤也、此歌春雨抄に出たり、

〔筆のすさび〕一熊茄子をいむ事 熊は茄子をいむ、深山の人、薪をこりにゆくに、かならず茄子

を帶ぶことを見れば、熊必ずはしりさる、茄子野にあるときは、熊膽小なり、茄子なき時は、大なり、